

日本語母語話者と非母語話者の相互学習型活動 における参加者の関係性と共生への課題 — 相互行為に現れる成員カテゴリー化の観点から —

杉原 由美

1. 研究の背景

世界規模の人的移動を背景に日本でも 1990 年前後より人口流入が激化し、多言語多文化の共存状況が顕在化している中、異なる文化背景や言語背景を持つ人々とどのように生産的に共存できるかという議論が「共生」をキーワードとして盛んに行われている。このような状況の下、日本語教育の領域でも共生を目指した実践の模索が行われており、その1つに「日本語母語話者（以下 NS）と非母語話者（以下 NNS）の相互学習型活動」がある。こうした活動は、日本社会への参入側 NNS と受け入れ側 NS との共生が求められる地域・学校・職場の3領域の内、地域住民を対象とした地域日本語教育と、大学などの高等教育機関での日本事情教育の2領域で試みられている。本研究の目的は、このような日本語教育における NNS と NS の相互学習型活動の実践を省みて、現場の観察から課題とその解決を探り、実践改善への示唆を得ることを目指すことである。

この相互学習型活動は、地域や大学の中で隣人として生活しながら人間的接触の少ないことが問題視されるマイノリティとしての NNS とマジョリティとしての NS が、対話をする機会を持つことによって互いに豊かな学びを得る可能性に期待して試みられていると総括できるが、個々の活動の直接的な目的は様々である。目的があいまいで、コミュニケーション自体が目的化しているという批判的な指摘もあるように、異文化の理解と受容や異文化コミュニケーションなどの視点、多文化共生の視点など様々な視点から模索が行われている状況といえる。本研究では、参入側 NNS と受け入れ側 NS が共生する社会の構築を目指して対話する「共生日本語教育」（岡崎 2007）と、その背景となる「接触場面における共生化」の議論（岡崎 2003）に注目して、

NNS と NS の相互学習型活動の理念を把握したい。接触場面における共生化とは、自己の持つリソースに依拠しながら、相手側の言語・文化とのネゴシエーションを通じて、参入側 NNS・受け入れ側 NS 双方に言語的共生化・文化的共生化の過程が形成され、「新たな統合的な能力・様式」が生じて環境全体を変える、という考え方である。

また、NNS と NS の相互学習型活動の実践を省みる観点として、本研究では教育社会学での議論を参考に、教育現場に根ざしたエスノメソドロジー・会話分析のアプローチ（秋葉 2007）を採る。このアプローチは、教育現場で起きている諸現象に対して、まず現場の精緻な観察を通じて問題を見出した上で、実践上の課題として解決や改善の道を探る姿勢で、関係者間の会話をトランスクリプト化したデータに対峙し分析していくものである。

2. 先行研究と研究課題

NS と NNS 相互学習型活動の先行研究を概観すると、話し合い場面での相互行為を対象とした研究と参加者の意識を調査した研究に大別される。そして、地域日本語教育の領域では相互行為に注目して NS と NNS の力関係に言及する研究が見られ、大学の日本事情などの領域では参加者の意識に注目して異文化の理解と受容に言及する研究が主として見られるのが、大まかな特徴と見受けられる。つまり、対象者が地域住民なのか大学生なのかによって、研究の視点にちがいがいるように思われる。

また、NS と NNS の接触場面の相互行為を対象とした研究には、エスノメソドロジー・会話分析の枠組みで成員カテゴリー化（Sacks 1992）という観点から分析したものがいくつかある。これらの研究では「会話の中ではいかにして NS と NNS となること（もしくは異文化間であること）が成し遂げられるのか」に関わる一般的な現象を探るものであり、

本研究とは方向性が異なるが、知見が参考になる。

以上のような先行研究の概観の上に、本研究の現場の観察から課題とその解決を探るという目的に照らし、研究課題を以下の様に設定する。NS と NNS の相互学習型活動はどの様に成り立っているのかについて、どの様な相互行為が行われているのかという点から、活動の成り立ちの一端を明らかにする。

3. 研究方法

本研究では相互行為を分析する枠組として、エスノメソドロジー・会話分析の、制度的状況における成員カテゴリー化に注目した分析の指針 (Watson1997) に基づいて分析する。分析の観点は、相互行為に現れる「成員カテゴリー化」と「会話の連鎖的な流れ」という2つの現象と、相互行為の帰結として浮かび上がる「秩序 (局所的社会構造、参加者の関係性)」に注目する。

研究対象は、相互学習型活動の「話し合い」場面であり、参加者が問題を提起する形式の地域住民を対象とした話し合いと、大学の一般学部生と留学生の授業における教師が問題を提起する形式の話し合いとグループワーク形式での話し合いを対象とする。このように多様なフィールドを対象として含むことによって、「NS と NNS の相互学習型活動」のより本質的な教育実践的課題を議論したい。

4. 研究の分析と考察

4.1 研究1—相互学習型活動の記述的研究1

研究1 (杉原 2003) では、地域住民を対象とした参加者問題提起形式での活動を取り上げ、NS と NNS の相互学習型活動がどのように成り立っているのかについて、次の観点から明らかにする。「話し合いの場面の相互行為において、どのような成員カテゴリー化と会話の連鎖の現象がみられ、結果としてどのような秩序が現れているのか。」分析データは、10名前後参加の約2時間の話し合い4回分である。

まず話し合いの開始時点に注目し、どのような成員カテゴリー化装置とどのような会話の連鎖がみられるのか、その後どのように推移するのかについて、繰り返し現れる発話の特徴的なパターンを手がかりに分析した。その結果次の2点が明らかになった。①成員カテゴリー化装置の特徴は、2つに大別できる。1つは「日本人/外国人」カテゴリー対で支配的にみられ、もう1つは、「家族」「性別」といった

参加者全員が共有できるカテゴリー集合で、多様なカテゴリー表出と捉えられる。

②会話の連鎖の特徴は、発話内容に「カテゴリー化呈示」がみられ「質問—応答」隣接ペアによって連鎖的にカテゴリー化が形成されていた。そして、特徴的な発話パターンとして「○○ (国) ではどうですか」という国籍カテゴリー有標質問と、「×× ってますか」という日本人所有前提の日本語説明がみられた。一方で「日本人/外国人」カテゴリーでない場面では、「○○さんはどうですか」と国を無標にした質問、日本人が所有していることを前提としていない日本語説明も現れていた。

次に、相互行為の帰結として何らかの秩序が生み出されていないか探った結果、「日本人/外国人」カテゴリーが顕在化して、相互行為上の非対称性と、そのカテゴリーに相手を囲うことによって発言を阻むという力の行使がみられるという現象が、場の秩序に関わると解釈された。

これらの3点の結論を踏まえ、次の研究への課題として以下の点が浮かび上がった。すなわち、「日本人/外国人」カテゴリーの顕在化&相互行為上の非対称性&そのカテゴリーに相手を囲うことによって発言を阻む力の行使という現象は、「NNS と NS の相互学習型活動の話し合いの道徳的秩序」の一端である可能性がある。このような秩序が見られることは、教育実践上解決すべき課題と捉えられる。よって、この秩序がこの場だからこそみられるものなのか、他の場でも共通して現れる現象なのかについて追求する必要があるため、研究2で探る。

また、「日本人/外国人」カテゴリーの顕在化&相互行為上の非対称性&そのカテゴリーに相手を囲うことによって発言を阻む力の行使という輪の中から抜け出すことは、どのようにして可能になるのだろうか。研究1では「多様なカテゴリーの表出」と解釈される場面がみられ、この問題の解決の1つの糸口とも考えられるが、他の場での現象も踏まえて秩序の転換について追求する必要がある。この点は研究3で探ることとする。

4.2 研究2—相互学習型活動の記述的研究2

研究2 (杉原 2007) では、研究1の場で見られた秩序 (「日本人/外国人」カテゴリーの顕在化&相互行為上の非対称性&そのカテゴリーに相手を囲うことによって発言を阻む力の行使という現象) は、大学生を対象とした授業の相互学習型活動でも現れ

るか探る。分析データは、教師提示の問題についてのグループでの話し合いと、参加者らが選択したテーマでのグループワークの話し合いで、4～5名参加、約40分16事例である。研究1よりも事例数を増やして広く検証することを目指した。

研究1の手順を参考に、まず話し合いの開始時点でどのような成員カテゴリー化とどのような会話の連鎖がみられるのか、その後中間部・終結部ではどのように推移するのかについて、繰り返し現れる発話の特徴的なパターンを手がかりに分析した。その結果次の2点が明らかになった。

①成員カテゴリー化装置の特徴は「NS/NNS」カテゴリー対とその他に大別された。

②会話の連鎖の特徴は「今起こっている行為の枠組みを決定し展開を方向付ける発話はNSが行って、その間NNSは黙る」という発話連鎖パターン（会話の順番取りの現象）によって、「NS/NNS」カテゴリー対が顕在化する。

次に、相互行為の帰結として何らかの秩序が現れていないか探った結果、「NS/NNS」カテゴリーの顕在化&相互行為上の非対称性&発言を阻む力の行使という現象がこの場の秩序に関わると解釈された。このNSとNNSの非対称性の特徴としては、個別の状況との深く結びつき違和感なく当然視されるような類のものである点が注目され、また力の行使の特徴は、相互行為の中で幻として現れる「母語話者のやり方」を背景に顕在化するというものであった。

研究1の結果を踏まえてまとめると、「日本人/外国人」カテゴリーと「NS/NNS」カテゴリーとは、同じカテゴリー化の現象と考えられる。つまり、地域住民を対象とした場でも、大学生を対象とした場でも、表面化している相互行為のパターンは異なっても、同じ秩序現象が現れていたといえる。そして「NSとNNSとなること」がやりとりを進めていく手段となっている一方で、「正しい日本語」「日本のやり方」が無意識的に優先されることによって、NSによるNNSへの力の行使を内在した非対称的な関係性になってしまっていることが分かった。

4.3 研究3 一相互学習型活動の秩序転換の研究

研究3(杉原2008)では、研究1・2にみられた「NS/NNS」カテゴリーの顕在化&相互行為上の非対称性&発言を阻む力の行使という輪を抜け出すことはどのようにして可能になるのか、活動内部に

糸口を探る。まず、研究2の大学生対象データのうち、4名50分のグループワーク1事例(アンケート用紙作成の話し合い)に焦点化し、話し合い後半で相互行為が転換していると解釈される場面を中心に、会話の連鎖と成員カテゴリー化を微視的に記述した。その結果次の3点が明らかになった。

①非対称的な関係性の形成について、一見「NS/NNS」とは関係ないカテゴリー化によって、NSが意見が優先される側に、NNSは周辺の側面に固定化されていたことが分かった。

②このようにして形成された非対称な関係性から相互行為が変化したきっかけとしては、自己他者認識をゆさぶり、NSとNNSの境界を引きなおすような成員カテゴリー化の交渉があった。

③この交渉の成立のポイントは、NNSのぶつかり合いを厭わない挑戦と、より重要な点としてNSが優先権を主張せずNNSの意見を受け入れることが関わっていた。

これらの3点を「接触場面の共生化」の観点で考察すると、NSとNNS双方の「困難な歩み寄りを伴った」ネゴシエーションが重要で、「新たな様式」と「環境の変化」の萌芽がみられた点が注目される。

次に、研究1の地域住民対象データでも成員カテゴリー化の交渉がみられるかという視点で、相互行為が途中で転換していると解釈される2事例を分析した。その結果、研究1で「多様なカテゴリーの表出」と捉えた場面は、「成員カテゴリー化の交渉」という観点から見直すと、「日本人/外国人」の境界線を引きなおしている意義があることが分かった。以上の結論をまとめると、「NS/NNS」カテゴリーの顕在化&相互行為上の非対称性&発言を阻む力の行使という輪を抜け出す糸口としては、境界を引きなおす成員カテゴリー化の交渉が重要で、本研究からは具体的に2つの方法があることが分かった。1つは、多様なカテゴリーの表出によって成員カテゴリー化の交渉が間接的に成立する方法(例えば国籍無標質問、日本人所有を前提としない日本語説明によって成立)であり、もう1つはNNS・NSとして対峙衝突し直接的に境界を消去する方法(例えばNSの優先権を主張しない受け入れによって成立)である。

5. まとめと示唆

本研究の結果、地域住民を対象とした相互学習型

活動でも大学生を対象とした活動でも、表面化している相互行為の特徴は異なっている、「NS/NNS」カテゴリーの顕在化&相互行為上の非対称性&発言を阻む力の行使という同じ秩序現象が現れており、教育実践上解決が目指されるべき課題と捉えられることが示された。また、「NS と NNS となること」がやりとりを進める手段となっている一方、「正しい日本語」「日本のやり方」が無意識的に優先されることによって、NS による NNS への力の行使を内在した非対称的な関係性が顕在化していることが分かった。つまり上記の秩序の源泉に、「正しい日本語」「日本のやり方」の無意識的な優先が関わっていると考えられる。そして、「NS/NNS」カテゴリーの顕在化&非対称的な関係&力の行使という輪を抜け出す為には、境界を引きなおす成員カテゴリー化の交渉が重要で、本研究からは2つの方法(①多様なカテゴリーの表出によって間接的に成立、②NNS・NSとして対峙衝突し直接的に境界を消去する)があることが分かった。

さて、「地域でも大学でも共通して見られる非対称的な関係への志向」は、NS と NNS の相互学習型活動にとって解決すべき課題と考えられる。しかし、これは現代社会とつながった解決困難な難問であり、一朝一夕には解決できないことを認識した上で、解決の方向性を探りたい。その際本研究では、NNS と NS の共生化の過程について、正の作用も負の作用も含んだダイナミックな過程として捉える視点で解決を探る。つまり、NNS と NS の非対称な関係性を活動の中に出てこないように封じ込めるのではなく、現れて当然なものでそれをどのように乗り越えるかを活動の参加者と共に探っていく方向で考える必要があると考える。そして、個々の教師が行う実践レベルと日本語教育領域全体の意識改革という2つのレベルで、解決を模索したい。

まず、個々の教師が行う実践レベルでは、活動内で「正しい日本語」「日本のやり方」の無意識的に優先されることを意識化する機会をつくり、それを乗り越えるような設計を工夫することが挙げられる。そして、相互行為の中で「NS/NNS」カテゴリー化に誰かを困らせて発言を阻むような行為が無意識的に行われないように発話を工夫する必要もある。また、「境界を引きなおす成員カテゴリー化の交渉」

が起こるような場面を積極的につくり出す環境を整える必要もある。つまり NNS のぶつかり合いを厭わない挑戦と NS の優先権を主張しない受け入れが現れるような話し合い、また多様なアイデンティティが表出されるような話し合いとなるよう注意を払う。また、参加者自身が相互行為的につくられる非対称性を演劇などで経験して、その転換の方法について積極的に考える機会を設けるという活動設計(秋葉他 2007)も一考する価値がある。

日本語教育領域全体の意識改革としては、特に「正しい日本語」「日本のやり方」の無意識的な優先について、現実相互行為上で NS による NNS への力の行使という弊害が起こっていることを示すことによって、意識改革の必要性を訴えることがあげられる。この際、「共生日本語」概念を普及させることが1つの方法として考えられるだろう。

引用文献

- 秋葉昌樹 (2007) 「保健室の構造・機能・意味」酒井朗編著『学校臨床社会学』放送大学教育振興会,83-95
- 秋葉昌樹・中根真 (2007) 「演劇的手法を用いた会話分析研究の実際」酒井朗編著『学校臨床社会学』,96-110
- 岡崎敏雄 (2003) 「共生言語の形成—接触場面固有の言語形成」宮崎司他編『接触場面と日本語教育—ネウストプニーのインパクト』明治書院, 23-44
- 岡崎眸 (2007) 「共生日本語教育とはどんな日本語教育か」岡崎眸監修 (2007) 『共生日本語教育学—多言語多文化共生社会のために』雄松堂出版, 273-308
- 杉原由美(2003) 「地域の多文化間対話活動における参加者のカテゴリー化実践—エスノメソドロジーの視点から」『世界の日本語教育 13 号』, 1—18
- _____ (2007) 「留学生,日本人学生相互学習型活動における共生の実現をめざして—相互行為に現れる非対称性と権力作用の観点から」『リテラシーズ3』くろしお出版, 97-112
- _____ (2008 印刷中) 「日本語教育の相互学習型活動における日本語母語話者と非母語話者の関係性の転換—大学授業でのグループワークの相互行為から—」『人間文化創成科学論叢 10 号』お茶の水女子大学大学院
- Sacks,H (Edited by Jefferson, G with an introduction by E. Schegloff)(1992) *Lectures on Conversation*, Oxford:Blackwell
- Watson,R(1997) Some General Reflections on 'Categorization' and 'Sequence' in the Analysis of Conversation. In S.Hester&P.Eglin(Eds.).*Culture in Action*: 49-75.University Press of America
- <付記>本研究は平成 18 年度科学研究費補助金若手研究 B (課題番号: 17720122) の成果である。